

# 近代日本における〈子ども〉の誕生（3）

——〈子ども〉の立身出世意識と石川啄木——

川 口 祐 二

山梨県立女子短期大学幼児教育科

The New Concept of Children in Modern Japan (3)

——Children's Aspiration for Rise in Life and Takuboku Ishikawa——

Yuji KAWAGUCHI

*Yamanashi Women's Junior College*

*Department of Preschool Children's Education*

The problem of aspiration for advancement or rise in life is solved only one-sidedly when the object is analyzed, in a scientific way, as an objective matter. In order to solve the problem justly, it is indispensable to have a subjective analytic view-point. In this sense, we should not exclude to examine closely the thoughts of literary men.

In this thesis, the writer tries to throw a light to the problem of aspiration for rise in life among children through the analysis of the case of Takuboku Ishikawa. The writer stands on the view of social history, which has been noticed as a scholarly trend recently. There are, of course, different view-points according to the position they take. Compared to the past, it is noteworthy that the critical mind and the method have been widened in the position of social history. Interdisciplinary approach, therefore, is required in this study, too.

**Keywords:** Child 子ども, Takuboku Ishikawa 石川啄木, Social history 社会史, Interdisciplinary approach 学際的研究, Education and Literature 教育と文学

## 一 問題提起

我が国において、とりわけその近代以降において、立身出世・上昇志向意識の問題は、教育観、歴史観、人間観などの普遍的な視座そのものを左右する大きな問題である。この問題にまともな錘鉛を降ろして本質を探照すれば、それが、各々の個人を〈舞台〉として演じられた存在と自由<sup>1</sup>、現実世界と精神世界、肉体(労働)と精神(労働)との対立相剋のドラマであることが見てとれる。それは単なる個人レベルの問題なのではなく、むしろその場合における個々人は二極に引き裂かれた分裂を演じる〈舞台〉なのであり、その〈舞台〉に、自分をも含めた社会の全要素が、演者として、あるいは裏方や表方として参加し、これら

参加者いっさいの重量を感受しながら個々人は、立身出世をめぐる、高揚し、煩悶し、拒絶し、あるいは無頓着を生きる。

人類の意識史上、心性史上<sup>2</sup>、きわだって重要なこの問題も、世俗の表層的・現象的な〈まなざし〉からとらえられるならば、まったく別様に見えるかもしれない。そこでは、意識の表層における現象、たとえば高揚や煩悶や無頓着やらが、即自的にそのまま実体とみなされ、一人ひとりの自我意識に訪れる、まぎれもない真実として確信される。つまり、そこには、その表層の背景にまで分析のメスを運ぶ眼力自体が存在しない。その結果、人々の自我意識は自らの〈主体性〉〈完結性〉を真に受けて、めいめい、様々な人生模様を生きる。すなわち、運よく社会的上昇を果たせた或る者は、家門や郷土や国家の誉れを、あるいは優生

思想と適者生存を口実にまんまと自己正当化にも成功するかもしれない。あるいは他を足蹴にして成り上がった後ろめたさに苦しみ、さまざまな贖罪行為であるがなおうとするかもしれない。運悪く上昇を阻まれた者は、成功者を嫉み、社会制度や教育制度の不備を呪詛するかもしれない。或る者は、そこから針のような間隙をのがさず〈敗者〉復活を果たすかもしれない。あるいはまた、成功、失敗そのものに無関心、無頓着に見えるような生き方を押し通す人もいるかもしれない。

いずれにしても、このような〈まなざし〉からとらえられる視界は狭く、一つの視角に限定されている。そこでは、目に見える表舞台だけが現実として信じられるだけであり、人々はあたかも濃い霧の中で見境なく攻撃の銃を向け合うような〈生存競争〉という愚を演じる悲劇から免れない。はっきりしていることは、この〈まなざし〉は、今日、我々が抱えている矛盾点の何ほどをも変革する力をもたないということである。そうした古く、疑わしい〈まなざし〉にとっては、けっきょく、抗しがたい動物的本能を、人間的な理性によってどれだけ自制し、他と調和するかが最大の関心事である。そこにおいては、個人の道徳や倫理の高低によって一切が決定されてしまうのであり、社会的視野は本当の意味では欠落されてしまう。そしてそれは、典型的な古典的人間観・教育観の入り江に向かって一散に流れ込んでいく。

ところで、立身出世・上昇志向意識の問題に対しては、分析対象を客観的な事物として扱う自然科学の立場、あるいは自己を捨象した外在的批判はそぐわない。それは表面的な解答しかもたらさないからである。このような問題に対しては、とりわけ主体的・内在的な分析視点が不可欠なのであり、この意味で、文学者の織りなしてきた思想潮流を吟味することを我々は避けられない。そこで、ここではまず、石川啄木を取り上げた。

さらにまた、本稿は、近年盛んに注目されている社会史という学問的潮流への強い関心のもとに書かれている。社会史をどう評価し、どう位置づけるかについては、さまざまな見解が提起されているが、本稿との関連においてそれを考えれば、従来の学問的立場に比しての、その問題意識と方法の広がりが特に注目される。一方の代表的な旗手であるアリエス (Aries, Ph.) だけに限って言っ

てみても、唯物論によって批判されてきた従来の観念論的立場とはまったく異なるかたちで、人間の意識・観念に照明をあて、史的唯物論の歴史観・人間観を乗り越えようとしている。また既成の個別科学が持つ専門分野にとらわれることなく、対象としての資料は、日常生活・風俗習慣、諸制度、住居・建築物からすべての記号空間、文化空間にまで及ぶと言っても過言ではない広がりを見せる。要するに、従来の用語で言えるとすれば、極めて学際的なのである。

社会史の持つこの広がりを視野におさめたいうえで、たとえば教育学における石川啄木の従来の扱い方を検討するならば、そこには重大な弱点が見いだされる。すなわち、そのような従来の分析の仕方においては、あらかじめ教育学という専門分野の枠内の分析視点が前提されていて、その前提に関わる部分だけが本体の石川啄木から切り取られてくるだけなのである。そして、不都合なことには、そこで切り取られた啄木像は啄木全体の像よりもはるかに狭小で、しかもそれと矛盾する側面すら見せてしまう。そこで、今日、社会史の思想的価値を踏まえながら、本稿の主題を分析するとすれば、教育、とりわけ学校教育から人間へではなく、人間から教育へという認識ベクトルをその視野の根底に据えることが不可欠であるということになる。それは、もちろん、哲学や思想一般への教育学の従属や併合、あるいはまた、教育学固有の領域の消滅をも意味しないということはいうまでもないことである。

## 二 若き啄木の歴史観と教育観

若き日の啄木が、大衆を睥睨する統治者きどりのヒロイズムに酔い、熱烈な主戦論を掲げる愛国少年であったことは、よく知られている。

「今の世には社会主義者などと云ふ、非戦論客があって、戦争が罪惡だなどと真面目な顔をして説いて居る者がある。・・・今や拳国翕然として、民百万、北天を指さして等しく戦呼を上げて居る。戦の為の戦ではない。正義の為、文明の為、平和の為、終局の理想の為に戦ふのである。ああ斯かる時に、猶且つ姑息なる平和を仰望する輩の如きは、蓋し夏の日遠来の響を聞いて直ちに押入の中に逃げ込む連中ではなから

う。」<sup>3</sup>

「世の中で頭脳の貧しい人だけが、幸福に暮らして居る。・・・朝生暮死の虫けらと同じく、彼らの生活には詩がない。詩のない幸福、・・・たとへ如何に平和な境遇に居ても、自分は心の富のために、不断に戦ひ、苦しみ、泣かねばならぬ運命を荷って居る。」<sup>4</sup>

「生徒と共に『君が代』の歌をうたふ。何かは知らず崇厳なる声なり。あはれ此朝、日本中の学校にて、悉く幾百万の『成人の父』共が此唱歌を歌ふなるべし、と思ふに、胸にはかに拵がりて、却りて涙を催すばかりの心地しき。・・・聖上陸仁陛下は誠に実に古今大帝者中の大帝者におはせり。陛下の御名は、常に予をして襟を正さしむ。予は、陛下統臨の御代に生まれ、陛下の赤子の一人たるを無上の光栄とす。」<sup>5</sup>

ここには、若き啄木本人の主張とは全く相反し、詩や文学とはおよそ無縁のもの、むしろ対極に位置するような上昇感性が語られている。啄木のこれらの論稿からも推察されるように、当時の日本はいわば近代の上昇期にあり、富国強兵の号令一下、欧米列強の資本主義を早急に摂取するを至上の国策としている。そしてたちまちのうちに対外に植民地を求め、いわゆる帝国主義の論理に即した膨張を進行させている。鏡に映る貧相な自己像を嫌悪するかのようにアジアの隣国を踏み台にすることによって、世界のひのき舞台に躍り出ようとする倒錯的な民族至上主義、それが当時の日本の支配層が抱いた国権意識の典型であり、当時の日本社会の大勢が自明の前提として準拠しようとした価値の枠組みである。言い換えれば、それが、彼らが正しいと信じ、彼らの〈まなざし〉にはそうとしか見えなかったあるがままの〈世界〉<sup>6</sup>であった、そういうことになる。

文芸評論家中村光夫は、この時代の〈子ども〉の心を強烈にとらえた意識が立身出世意識であることを、次のように語っている。

「日清戦争から日露戦争にかけての十年間は新時代の青年の間に出世意識がもっとも無抵抗に受け入れられた時期であり、個人的野心が理想主義と矛盾せず同居できた時期でした。」<sup>7</sup>  
ものに憑かれたように戦争に駆り立てられていくこの国民大衆の狂熱を、まさに若き啄木の心性は象徴している。当時の社会が正しいと信じた〈世

界〉に、若き啄木もまた自らのアイデンティティを求め、それを〈ソト〉からとらえうるような意識の自由な水準に達していない。いわば、社会が正しいと信じた〈世界〉にとらわれ、その前提を自由に対象化しようとする意識の水準には達していない。もっと平易な比喩を使えば、啄木は、その枠組みの意志に柔順であろうとする〈ウチ〉側の住人、いわば〈良い子〉・〈優等生〉であったということになる。現実社会の目に見える表層における〈勝者〉・〈勇者〉の正義を鵜呑みにして自らもそれに一体化しようとする、それは、社会の枠組みを放置したままで自分だけは〈選民〉として上にはい上がろうとする、立身出世意識の典型であり、必然的に、一人ひとりの〈隣人〉の貌を見失ってしまう意識水準にある。

このように〈ウチ〉にとらわれた意識には、義戦という大義名分の欺瞞を道破して、卑怯な謀略と裏切りと酷たらしい虐殺と流血といった戦争の実相に迫る炯眼など薬にするほどにも存在しない。また現実の惨苦からの救済を願う大衆の天皇崇拜につけこんで、その天皇制を隠れみのに大衆からの収奪と権力欲の実現を図る国家の実像を仮借なく洞察するという大胆さといったものも、全く望みえない。人間に固有の〈想像世界〉の本質と機能、とりわけ文学や詩などの本質と機能とは何か。もちろんそれは社会が自明と信じる価値基準を破壊して〈ウチ〉からの自由を達成すること、支配権力によって自己正当化に利用される〈神話〉・〈正解〉を破壊すること、そして、そうすることによって人々の世俗的利害・党派的利害によって曇った〈まなざし〉から喪失させられてしまった一人ひとりの〈隣人〉の貌を蘇生すること、一人ひとりの個人を自由と解放に導くことにある、本来そう考えられるべきである。そして、もしそうであるのならば、若き日の啄木の心性は、繰り返すことになるが、まさに文学や詩のベクトルとは全く逆向きの方角を示していることになるのであり、それゆえ、根底からの批判がくだされることは避けられない意識水準であるということになる。

若き啄木におけるこの心性は、彼の次のような歴史観と教育観に明らかに象徴されている。

『『世界の歴史は唯これ大人物の伝記なるのみ』・・・若し世界の歴史から、総ての方面の大

人物一切を抜いて了ったら、何が残るか？ 残るものは、目玉を引き抜き骨を抜いた、兎ても吾人の想像するさへ堪へ難き醜惡の死骸ではないか。天才——即ち大人物は、世界の骨である、目である、脳である、人生の司配者である、人間の理想的典型である。」<sup>8</sup>

「教育の最高目的は、天才を養成することである。世界の歴史に意義あらしむる人間を作ることである。」<sup>9</sup>

啄木のような〈まなざし〉によってとらえられる現実とは、その表面だけであり、歴史と教育についてもまた、とらえられるのは、その皮相だけである。若き啄木の狭窄した視野は、〈天才〉に対しても〈勇者〉に対しても、その社会の通念によって指示されたとおりに、人生の〈勝者〉として崇拜する以上の判断能力をもたない。

### 三 〈子ども〉の立身出世意識と啄木

ヘーゲル (G. W. F. Hegel) やマルクス (K. Marx) を引用するまでもなく、国家は現実的側面と宗教的側面との二面性を有している。後者の宗教面において、国家は普遍性・協調性・永遠性・完全性が自らの属性であることにおいて揺るぎない自負心を抱き、その属性を携えて国民に対峙する。そして、自らの国境内に所属するその個々の成員の欠如意識——個別性・利己性・有限性・部分性——を補償し、救済する能力の優越性によって国民を圧倒し、自らの支配力を正当化する。若き啄木が国家の統治や理想の問題に魂を抜き取られ、群衆の中から自分だけぬきこんでるために、現世における権力ヒエラルキーの最上位を誇る国家、あるいは国民が自らの行動指針の最高權威として仰ぐ国家との同一化を願って止まなかったこと、そうした問題と国家のその宗教的本性とは密接な関連を有する。そしてまた、その願望の度合いが、啄木においては、通常よりはるかに極端であったという事実は、彼の生育歴の問題に引きつける分析作業を必須とする。普遍的な共通性からの逸脱の問題、つまり個人差・個性の問題は、まず家族関係・母子関係の分析を必要とするはずだからである。

啄木の妹の光子が、啄木の欠如意識の激しさに関わるような、幼き日々のエピソードを書きのこ

している<sup>10</sup>。我々は、彼の妹のこの述懐を通して、啄木がただ一人の跡取り息子であり、俊秀であり、しかも小さいときひどく病弱な時期を持っていること（とりわけこの身体的虚弱と欠如意識との関連は心性史的に重要な事実であるはずである）などが理解され、そうした事実から、彼がいかに両親から溺愛され、過度のわがままを許されて育ったか、いかにその過保護と過干渉と病気による心的屈折のために現実との間に不自然な段差を強いられ、現実と直接にふれ合う体験を逸して育ったか、これらのことを我々は十分に窺い知ることができるのである。こうした特異な生育環境を持つならば、人間の〈想像世界〉は、否応なく、極端な拡大を迫られるはずである。啄木における文学面の天才的な早熟性、大衆蔑視に等しい統治者きどりの上昇志向性なども、その現実的・地上的な諸関係の結果のひとつと考えられるべきである。天才、狂気などを、宿命論や決定論によって神秘化して解釈されなければならない理由はいささかも無いのである。文学者伊藤整が、若き啄木の性格として列挙した次のような要素も、特異な生育歴のもたらした結果の中にももちろん含められて良いものである。すなわち「無思慮な、むしろ浮ついた英雄きどりと、非現実な計算、空想癖、激しい悲喜の落差」。<sup>11</sup>

支配層が抱いた国権意識の強い張力に方向づけられながら、当時の日本人の心性の平均値は、資本主義の上り坂をひたすら踏破することに、自らの存在証明を発見しようとしている。社会の大勢が正しいと信じた〈世界〉像は、もしも改変しようとするれば、直ちにあちこちで自分の身を守るためのヒステリックな怨嗟の声が沸き上がり始める。そうした硬直した閉鎖系から生み出される〈賞罰理論〉によって追いたてられながら、当時の日本人は、啄木もそうであったように、目的達成のためには武力による紛争決着、つまり戦争をも辞さないという迷妄の意識段階をうろついている。軍事的決着を不可避の自然とみなす意識の裏側には、人間に固有の〈想像世界〉<sup>12</sup>に対する無理解と、目に見える〈現実世界〉における表面的な他者の服従を勝利とみなす、想像力を欠落した人間観、要するに人間存在の本質そのものに対する無知が必ず付着している。そして、ごさかしい謀略と奸智の現実的効果を、政治におけるリアル・ポリ

ティックスや人生における賢明な処世術としてそのまま正しいものとみなそうとする、いわばマキャベリズム的な人間観が必ず潜んでいる。そして同時に、暴力による支配を正当化する意識の裏側には、どこにしわ寄せをして、どこに媚びを振って、とにかく自分（自民族）だけは生き残ろうとするエゴイスティックな利己主義、あるいはタブーに触れて自分だけ孤立することへの怯懦から、体制に柔順であることを誇示するために、標的となったスケープゴートの懲らしめに我先にと馳せ参じる自己保身、さらには、帰属集団の利益のために自らを犠牲にすることに個人が陶醉し、それを喝采し、無意味な〈団結〉や〈和〉の確認を図ろうとする狂信的な国家主義、おそらく極めて未開の、そして、今日においても未だ克服していない倒錯した心性が隠されているだろう。

しかし、自らの社会が正しいとする〈世界〉を乗り越え、その権力関係と価値体系を否定する新しい意識水準に立つこと。そうして一人一人の個人の貌を〈まなざし〉に復権させることは、人間にとって、実に困難な作業である。社会の準拠枠を〈ソト〉から個人の自由と解放の立場にたって批判する意識水準に立つためには、実社会における体験を通してつかみ取った、社会矛盾に対する実感が不可欠となる。なぜなら、体験に裏打ちされ、実感を血肉化した洞察と理念だけが、国家の現実的側面と宗教的側面との乖離を見抜くことができるからである。すなわち、それだけが支配権力によって語られる〈神話〉の欺瞞を見抜く唯一の手段であり、国家がタテマエで述べているに過ぎない虚偽からの脱出を可能にするからである。

以上の考察から明らかなことは、〈子ども〉にとって、社会の準拠枠を越えるという課題は、至難の技だということである。なぜなら、〈子ども〉は家庭の保護膜内に止まっている存在であるから、実社会の矛盾を本当の意味で体験することが不可能であるからである。あたかも窓越し、格子戸越しに表通りを眺めやるように、社会の悲しさ・理不尽さを〈子ども〉は感傷したり、地につかない正義感を飛翔させることはできる。しかし、体験に裏打ちされた真の理念によって、〈神話〉を打ち砕き、〈世界〉を塗り変えることはできない。しかも、〈子ども〉という存在は、自立していないことへの劣勢意識をどこかに潜在させているか

ら、一般的に、社会の価値体系に柔順に従う現実主義者である。この意味で、社会の支配的な価値基準に対して、〈子ども〉がすなおな〈良い子〉であるということは、むしろ自然なことであるということになる。家庭の保護膜に守られ、実社会の辛酸をなめる必要のない段階にある〈子ども〉という存在は、社会の最上位への立身というタテマエを鵜呑みにし、それを夢見る幼稚な特権を許されている。逆にいえば、人間の社会が——これまでのすべての社会がそうであったように——人間に序列をつける特定の価値基準を持っているならば、そしてその矛盾を補償するために、友愛と自己犠牲を訴える宗教的側面を持っているならば、〈子ども〉という存在は、社会のそうした欠陥を進んで具現し、それを正確に映し出す鏡としての役割を持つ存在でもある。

こうして、〈子ども〉の心性はすべてすなおな体制順応に始まる。〈子ども〉のころは誰もが時代の子であり、アニメや漫画のヒーローやヒロインのとりこである。たとえば、男の子ならば、勇者に自らを同一視し、戦闘場面における勇気と自己犠牲に我を忘れる。（このとき〈子ども〉は、おそらく、個が集団の犠牲となるときの陶醉感、人類が未だに克服しえないで苦しんでいる未開の心性を、いわば個体発生として無意識にくり返しているのである。）

〈子ども〉のこうした宿命ともいえる本性を、晩年の啄木は、自らの若かりし頃の言動を自嘲するかのように、次のように述懐している。

「確か五年に進級して間もなくのことだ、新しく来た国語の教師が『将来の希望』といふ作文の題を課したことがある。答えは種々であったが、要するに皆希望といはずに空望といった方が当たる様な許りであった。政治家になりたい、実業家になりたい、医者になりたい——それらはまだ可いうちだが、一生正直に送りたいとか、一身を国家に捧げたいといふ類は、最も多くあった希望で、そして最もアテにならない希望であった。」<sup>13</sup>

子どもがなぜにこうした空疎な妄想を言わせられ、そのとき子どもを突き動かしている噴流はどこを出射口としているのか、そして大人になって何に覚醒するがゆえに自らの「空望」に赤面することになるのか。啄木のこの文章は、人間のこの根本的な弱点＝長所、まさにそれを見据えるため

に必要な高次の視座を獲得している。

#### 四 啄木における〈回心〉

子どもの誰しもが蹉跌を強いられる〈上昇志向〉の呪縛に、若き啄木も典型的に、いやむしろ人一倍激しく取り憑かれた一人であった。それが、前節において、明らかにされた。そして、この〈上昇志向〉の問題には、人間にとってもっとも厄介で、おそらく人類発生と同時に今日までずっと居座り続けている問題が、まるでくもの巣のように執拗にまとわりついてくるのである。すなわち、他を犠牲にしても自己（集団）の生存と生活を守ろうとする生存競争あるいは動物的本能の問題、そして自分（たち）の身を守るためには、強者の既得権には手をつけず、弱者にしわ寄せするのが一番手っ取り早く賢明で、上手な世渡りである、あるいは標的となったスケープゴート制裁の先陣争いに我勝ちに馳せ参じ、自分が体制に柔順であることを立証しようとする、あるいはまた有力者に取り入り、体制のしきたりを盾に自分だけ浮かび上がろうとする、有力者に盾突けば下手すればしっぺ返しをくらう、要するに〈いじめ〉構造の中では、巻き添えを食らわないように、傍観者でいるのが一番安全である、という世俗知の問題（最近の、いわゆる〈教育荒廃〉の現象において、つまりはかならず学校現場において、その典型的な事例が不幸にもまざまざと露呈してしまっているのだが）。そしてまた、自分の身を犠牲にしてまでも同胞や正義のために献身的に尽くすことに美や崇高さや偉大さを感じる、倒錯したあの人間固有の本性の問題<sup>14</sup>などなどが絡みついてくるのである。

おそらく、人間社会の最大の病根を構成するこの問題の呪縛から自らを解き放つことは、実に困難な課題のはずである。欠如意識の過剰な石川啄木は、この陥穽に人一倍無防備な傷つき方を強いられましたが、よく耐え、その深手を反撃のバネにしながら、この困難な課題に立ち向かっている。そして、日本の近代思想史上、画期的といえる水準にまでそれを押し上げるのに成功しているのである。

しかし、くり返すが、この〈回心〉の過程は、傷つきやすい彼が当時の貧弱な社会的基盤によっ

て物質的にも精神的にも徹底して翻弄されるという代償を支払うことなしには、手に入れることができないものであった。啄木は、ひととき悲惨な状態の中で人間が〈真実〉に覚醒していく場合の、ひとつの典型的な事例を我々に身をもって示さざるをえなかったのである。今日に比しても、個性の自由な解放ということに極端なまでに臆病な当時の社会世相にあって、過剰な心性を持った啄木の自己実現の希求は、一般大衆の〈まなざし〉にとって、ほとんど浮世離れと誤解されても仕方のないような類のものであった。

人間関係は幾度となく破綻をくり返し、そのたびに手ひどく傷つき、悶着を起こしても、彼は、今手にしている生活水準の確保ということを考慮に入れながら用心深く進退を考える、そうした当たり前で、世間並みの〈処世術〉を選べない。こんな〈田舎〉でくすぶってなどいられないという自負心をを振りまいて周囲に煙たがられ、一時の正義的感情に忠義立てして、生計の成り立ちのゆくえも考えずに破局を急ぐ、そういう破滅的・逃避的な解決方法に自らを追い込んでしまう。そのために絶え間のない貧困に見舞われ、そしてその現状打開を図って幾度も流浪し、身内と定着を厚遇し、〈ヨソ者〉と〈ソト〉からの批判を白眼視する日本の閉鎖社会にあって、ますます孤立し、排除されるスケープゴートという損な役回りを押しつけられる。そして、とどのつまりは、不治の宿痼に取り憑かれ、世間の尺度からすればまったくの不遇と言わざるをえないような境遇のまま、啄木はこの世を去るのである。

「今日までに私の享けた苦痛といふものは、すべての空想家——責任に対する極度の卑怯者の、当然一度は享けねばならぬものであった。さうして殊に私のやうに、詩を作るといふ事とそれに関連した憐れなプライドの外には、何の技能も有っていない者に於て一層強く享けねばならぬものであった。・・・『遂にドン底に落ちた。』斯ういふ言葉を心の底から言わねばならぬやうな事になった。と同時に、ふと、今迄笑っていたやうな事柄が、すべて、急に、笑ふ事が出来なくなったやうな心持になった。

さうしてこの現在の心持は、新しい詩の真の精神を、初めて私に味はせた。」<sup>15</sup>

ここで啄木は、非現実的にすぎる自らの性格を、

自嘲混じりに嘆息し、すさまじい困窮と憔悴を正直に告白しうる、ある〈距離感〉を会得している。そして、そのようなときに初めて、人間に或る内面的な〈回心〉が忽然と訪れるものである事を的確に描写している。こうして、実社会における、いわば血みどろの体験を通して、啄木がきりぎり舞いさせられた自分自身の特異な若き心性と、それを強いた日本社会の貧弱な物質的・精神的基盤とを客観化しうる能力を彼が獲得したことを、我々は理解するのである。そして、この〈回心〉以後の啄木の心性は、もはや〈立身出世〉の無意味な意識にむやみに囚われるような水準からははっきりと訣別している。

## 五 立身出世意識と自然主義文学思想

物心両面の手ひどい挫折を余儀なくされながら、安らぐことのない漂泊を続けた啄木は、いっさいの行き詰りの打開を図るように、明治41年4月、家族を友人にあずけ、単身、東京へ上る。小説創作によって、文筆一本の経済的自立と立身を目指してである。しかし、意に反して、目当ての小説は一向に売れず、ただ他人の善意にすがって寄食するような困窮が続き、ついには自殺念慮に取り憑かれるような鬱屈した生活に陥る。

そして、まさにこの時期、啄木の〈回心〉、決定的な覚醒へ向かっての生涯最大の転換期が始まるのである。我々は、彼の〈回心〉の軌跡を、たとえば、明治41年6月ごろからの、後年「一握の砂」として刊行される短歌、明治42年4月ごろからの「ローマ字日記」、同年5月ごろから6月にかけての小説「我らの一団と彼」、同年11月から12月にかけての評論「弓町より（食ふべき詩）」、同年12月ごろの詩編「心の姿の研究」、そして明治43年8月ごろの「時代閉塞の現状」などを中心とする、とりわけ自然主義文学思想への批判を主内容とするいくつかの評論、そうした社会批判の根源に爪をかけようとした彼の労作をたどることによって、かなり鮮明に理解することができる。

明治末期ごろにくり広げられたいわゆる「自然主義論争」にも参加することになった、この啄木の自然主義文学思想への批判は、とりわけ重要である。そこを入射角として、我々は、彼の〈回心〉の過程における思想の核心に迫ることができるか

らである。今日の我々が抱えている社会矛盾の問題点にまで軽々と到達する、優れた射程を誇る彼の思想は、我々がどのような〈まなざし〉の転換、パラダイムの転換によって、この困難な今日の状況を切り抜けることができるのかについて重要な示唆を与えてくれる。

啄木のこの重要な自然主義批判における彼の思考過程を端的に理解できる具体例を、その著作の中からひとつ抜き出してみよう。

「妻を有ちながら、他の女に通ぜねばならなくなった、あるいはさういふ事を考へねばならなくなった男があるとする。そして、有妻の男子が他の女と通ずることを罪惡とし、背倫の行為とし、唾棄すべきこととして秋毫寛すなき従来の道德を、無理であり、過酷であり、自然に背くものと感じ、本来男女の関係はまったく自由なものであるという原始的事実に論拠して、従来の道德にどこまでも服従すべき理由としては無いのだと考へたとする。そこまでは可い。もしもその際、問題の目的が『しからば男女関係の上に設くべく、無理でなく、過酷でなく、自然に背くものでないところの制約はどんなものであらねばならぬか』という事であるのを忘れて了って、既に従来の道德は必然服従せねばならぬものでない以上、凡ての夫が妻ならぬ女に通じ、凡ての妻が夫ならぬ男に通じてても可いものとし、ないしは、さうしない夫と妻とを自覚のない状態にあるものとして慥れむに至っては、性急も甚だしいと言はねばならぬ。その結果は、啻に道德上の破産であるのみならず、凡ての男女関係に対する自分自身の安心といふものをまったく失って了はねば止まない、乃ち、自己そのものの破産である。問題が親子の関係である際も同である。」<sup>16</sup>

さて、性をめぐる「背倫の行為」をただ「罪惡」や唾棄すべきこと」とみなす主張は、すでに、特定の自然観・人間観を前提している。まず、意志・理性を自然（の欲求）・感性より優位におき、意志が動物的、本能的なものを克服することによって人間的な文化が創造されていくという、理性優位に立つ一種の理想主義的な価値観が前提されている。そして、同じことの他面を述べることになるのだが、価値として優位に置かれた理性は必然的に獲得されるべき目標となり、その目標達成のた

めに修養し、それに到達しえた人間は倫理的・道徳的人間として評価される、そしてそうした実践過程を経て理性は現実の実現されていくという、実践論・社会変革論が前提されている。

このような前提に人間の〈まなざし〉が限定されてしまうと、視界に入るいっさいが優劣・上下の二値概念によって二分されてしまう。視界に広がるいっさいは平等な存在に見えなくなる。日常生活よりも知的な生活が、肉体(労働)よりも精神(労働)が、私生活よりも公的生活が重要に感じられ、遊びや快楽の解放はただ道徳的・社会的規律へ復帰するための気晴らしとしての意味を持ったときにのみその存在価値が認められる。そして、不倫や遊蕩はただ改悛と啓蒙・教化の対象としての負の意味しか持たない。人間のいっさいの基底としての意味を持ち、そしてその本来的な——一人ひとりの個人の自由を築く——解放がいっさいの社会改革の目標であるべき人間の自然(の欲求・衝動)が、ただ調整され、監視され、処罰され、矯正される対象として、社会生活や国家理念の下位に置かれ、一人ひとりの個人を抑圧する。肉体と精神が、実生活と文学が、大衆と知識人が、教育される者と教育する者が、遊蕩と倫理が、逸脱と秩序のいっさいが優劣・善悪の二元論によって対立することになる。そして、後者には前者を圧倒する価値が与えられ、後者は前者が到達すべき目標となる。後者はその深部へ向かって根本的に分析されるべき表層概念であるのではなく、そのまま信じられるべき実体概念であるとされる。自分と自分が、自分と他人が、自分と社会が、絶え間ない不毛の闘いに追い込まれる。

まさにこの地点からである。若き啄木が、大衆を睥睨する統治者きどりのヒロイズムに酔い、見当違いにも正義と理想の為に戦争を礼讃したのは。そして、頭脳の貧しい大衆を虫けらとののしり、「陛下の赤子の一人たるを無上の光栄」とするなどと狂信的な愛国心を吐露したのは。そしてまた、一人ひとりの〈隣人〉の貌を見失い、自分だけは何事も許されると思ひ込む若者特有の選良意識を肥大させ、偉人や天才や大人物だけが歴史を支え尊敬に値するなどという途方もない観念を信じ込んでしまったのは。

一人ひとりの〈隣人〉の貌を見失ってしまう観念による肉体の支配、公による私の支配、〈生活者〉

からの離反と〈上昇志向〉、大衆蔑視と〈立身出世〉、〈意識〉による〈存在〉の超越という人間に固有の本性、人類はいまだかつてこの呪縛から逃れ得たことはない。物質的な貧困の克服にも、自由の基盤を固めるのにも飛躍的な成功をおさめてきた現在の社会においても、まだ、ある特定の方向性と価値基準を〈理想〉として持ち、その〈正解〉への貢献度によって報酬が定まり、無能・無用の評価によって冷遇、零落、排除が待っている。人間はその〈内部〉で否応なくその〈正解〉を目指すことを強いられ、否応なく〈上昇志向〉・〈立身出世〉を強いられ、絶えずその社会の境界線・〈行きどまり〉にとまどい、その〈外部〉に放り出される恐怖感に苦しめられる。どんな形であれ、値踏みし、追放する〈理想〉・〈内部〉・〈外部〉・〈行きどまり〉を属性として残存させている社会は、権力と支配を手放すつもりがないということを実証している社会であり、生活そして肉体を養うことに見返りを要求し、肉体との対立・私との対立を克服するつもりがないことを自ら立証している社会である。そうした社会が正しいとする理想は、人間の自然と対立した理想であるに過ぎず、まだ非人間的な要素を残存させた理想であり、真の理想とはいえないはずである。

人間は、人間の固有の本性による避けられない迂回路ではあるのだが、自らの自然・肉体に対立・矛盾する〈理想〉を掲げ、それにむかっての向上心と実践への意志力によって、啄木がまさに喝破したように「人間それ自体が特に偉いものだという謬想」<sup>17</sup>を信じ続けてきた。そして、「本来男女の関係はまったく自由なものであるという原始的事実」に立脚すれば、ほとんど理解し難いような「無理」で、「苛酷」で、「自然に背く」戒律を自らに課し続けてきた。さらにまた、「古いことを言えば、あの武士道というものも、古来の迷信家の苦行と共に」<sup>18</sup>、その無理で過酷で、自然に背く戒律の例であり、やはり人間を二分し、非人間的な戦いに人間を駆り立ててきた。こうして、「人間を実際以上に評価していたことは、・・・畢竟、過去の人間の抱いた謬想中の最も大なる謬想であった」<sup>19</sup>のであり、「人間の最後の発見は、人間それ自身がちっとも偉くなかったということだ!」<sup>20</sup>ということになるのである。

自然主義文学思想がこの虚偽の理想主義、事実

を回避する欺瞞と「卑怯」、大衆蔑視を標的としたことはまさしく正しかった。彼らのとった方法は、愛欲も含めて人間の自然の姿をありのままに「描写」することによって、〈理想〉に舞い上がっている人間を地上に引きずり降ろすというものであった。自分の現実を見失い、虚像に酔う人間を覚醒させる方法として、これは十分な妥当性を含んだ攻略法である。啄木の言葉で言えば、自然主義文学運動のもつ意義は「文学と現実の生活を近づける運動」だったのであり、まさしく当時の日本社会がその虚偽と限界から脱するためにぜひとも必要としていた「時代精神」であった。そして、それゆえにこそ、当時、「自然主義は確実に文壇を占領した」<sup>21</sup>のである。

限界を有していたとは言え——このことについては後述するが——、日本の自然主義は、当時の社会の支配的な価値基準が人間の肉体・生活、つまり自然（の欲求）を抑圧し、対立矛盾するものであるにすぎないことを明示するのに大きな貢献をした。当時の社会の因習的な道徳や理想、「宗教的、道徳的、或は芸術的に作られた美麗なる世界」<sup>22</sup>は「自然の真を打破しもしくは蔽遮」<sup>23</sup>してしまう愚をおかす。男女の関係においても、親子の関係においても、既存の因習道徳は人間が本来望んでいる自然（の欲求）をあたかも罪悪のように、動物的・本能的なものとして見下し、抑圧・隠蔽する。しかし、もちろん、自然主義運動が正しく目指したように、人間の「暗黒面は人生から掩蔽し去られるべきものでは無い。」なぜなら「是に最もよく人生の真相が見える」からであり、「又は少なくとも是の半面を算入せざる限り真の人生は分からぬ」<sup>24</sup>からである。つまり、こうした島村抱月の自然主義擁護の主張は、けっして否定することのない真実を含んでいるということになる。なぜなら人間の暗黒面・醜悪面を、とりわけ自分自身の内面のそれを、主体性をかけて、正直に率直に暴露・告白するということは、その社会の支配的な価値基準における善・〈正解〉を否定することだからであり、それへ移行しようとする上昇志向を自らの存在にかけて拒否すること、生活からの遊離と大衆蔑視すなわち〈立身出世〉に根底的な懐疑を投げかけることにつながっていく唯一の通路だからである。そしてまた、その通路を通ってのみ、人間は自らの虚像から覚醒することがで

きるからである。それゆえに、啄木もまた前段で述べたように、自然主義運動を高く評価せざるをえなかったのである。

しかし、日本の自然主義には、明らかな限界点が存在していた。啄木も、このことについてははっきりと言及している。すなわち、人間の暗黒面・醜悪面をあばき、「人間も他の動物の司配されると同じ法則に司配されるものだ」<sup>25</sup>ということを暴露するのは、その社会が前提としている善悪・価値基準・権威と欺瞞、けっきょく「人間それ自体が特に偉いものだ」という謬想、まさにそれを「破るべき効果はあった」<sup>26</sup>。しかし、人間の動物性、野獣性といった暗黒面・醜悪面を正直に直視すること、それらを摘出しようの能力に優越感を持ち、良識にのっとった世間一般の常識的な生活を欺瞞として「性急に」もそれに軽侮の意識を持つとすれば、自然主義は既成の因習的な道徳・理想と、逆の方向からではあるが、同一地平に再降下することになるのである。

人間の動物性、そして暗黒面・醜悪面を正直、大胆に意識しようということ自体に特別な価値を置き、世間一般の大衆の意識の低さに対して自らの「神経の鋭敏」さを「誇り」、「得意になる」ような単純な優越感に陥ること<sup>27</sup>、そして、新しい性道徳の考え方を実践できないような男女を「自覚のない状態にあるものとして哀れむ」ような錯覚に陥ること、あるいはまた、「苦悶もなく、悲哀もなく」、「浅薄なる安心に満足する」既存の立場を否定して、そうした見せかけの安心を「ふり棄てて自づから苦悶の生に入る」自然主義文学者は「大いなる勇氣」を持っているとするような片上天弦の評価<sup>28</sup>、それらいっさいは、啄木に言わせれば、「恐るべき誤謬」であり、「現代の人間が抱くあらゆる謬想中の最も大なる謬想であるということになる」<sup>29</sup>。なぜなら、それは、人間を実際以上に理想化する古い価値基準とは逆の形態で、むしろことさら「人間を実際以下に評価する」<sup>30</sup>擬悪趣味・露悪趣味の形態で、しかし古い価値基準とまったく大同小異の大衆蔑視・生活遊離に陥ることを意味するだけだからである。

## 六 終わりに

人間にとっての究極の理念・理想は、一人ひと

りの個人が自らの肉体との対立、生活・大衆との対立、要するに自然との対立から解放され、誰にも何にも、物質的にも精神的にも、なんら依存することなく、人間が真の意味で〈ひとり〉で生きていくことのできるような社会をめざすというところにある。ところが、日本の自然主義が抱いた変革理念は、せっきく既成の価値基準・人倫の教えを強調する道学者的な社会規範の非人間性・生活遊離と大衆蔑視に気づき、それを批判しえたにもかかわらず、また新たな生活遊離と大衆蔑視に舞い戻り、また新たな〈立身出世〉と〈排除〉の〈まなざし〉を作り上げるにとどまるにすぎないものであった。既成の権力とその抑圧への変革を唱えながら、新たな生活遊離と大衆蔑視の古いパラダイムへと失墜してしまう思想的陥穽の問題こそが、本論で扱った最も重要な主題であり、そしてまた今日まで人類が最もてこずり、未だ解決することができないでいる問題である。権力と支配を批判する側に属していたつもりが、いつのまにか抑圧する側にまわってしまうというこの難解なパラドックス、権力を批判していたつもりが、いつの間にか権力の側にまわってしまい、古い権力にただ自分が新たな権力として取って代わるだけの、単なる権力交代にとどまってしまうという問題。つまり、〈立身出世〉と〈生存競争〉と〈権力抗争〉を人間の逃れられない本性とみなして、人間を必要以上に貶める人間観の問題。この問題は、その新たな権力が、表面的には、個人の精神や主体性に重きを置く自由主義的な理念を唱えていようが、イデオロギー的には逆に、経済社会的な下部構造の変革に重きを置く進歩的唯物論の理念を唱えていようが、この社会から一掃されるべきであり、否定されるべき対象にすぎないということではまったく同一である。すなわち、いかなる権力も根底から批判されるべきなのであり、一切の権力は〈死滅〉に追い込まれるべきなのである。

石川啄木の成熟以後の思想、とりわけその自然主義批判は、まさにこのいっさいの権力の〈死滅〉の問題をめざしているものと解読されるべきである。たとえば、「一切の美しき理想は皆虚偽である！」<sup>31</sup>から自然主義は否定されなければならないというような、あるいはまた「田山（花袋）氏は文学を人生に近づかした、そうして遠ざからしめた。」<sup>32</sup>というような彼の二見難解な発言は

ど、彼の言わんとすることを鮮やかに伝えてくれるものはない。こうして自然主義文学者が内省に失敗し、振り捨てることのできなかった大衆蔑視と生活遊離を鋭く批判する思想水準に啄木が到達している以上、彼の次のような唯物論的・経済的変革重視や国家批判の発言もまた、もちろん、以上に述べてきた本論の文脈を看過することなく解読されなければならないのである。

「我々の理想はもはや『善』や『美』に対する空想である訳はない。一切の空想を峻拒して、そこに残る唯一つの真実——『必要』！ これ実に我々が未来に向かって求むべき一切である。・・・『明日』の必要・・・」<sup>33</sup>

「自分自身の生活の内容をなしているところの実際上の諸問題を軽蔑し、自己そのものを軽蔑する」ことがあってはならず「地から足を離して」はならない。<sup>34</sup>

「健康と長寿とを欲し、自己および自己の生活（人間および人間の生活）を出来るだけ改善」することが最も肝要である。<sup>35</sup>

「国家！国家！ 国家という問題は、今の一部に人達の考えているように、そんなに軽い問題であろうか？」<sup>36</sup>その「国家が今日まで我々の敵」<sup>37</sup>であることを、我々はずっと見過ごしてきたのである。

なお、本論稿は、関東教育学会（1993年 第20号）掲載の拙稿「石川啄木における人間観と〈回心〉について——教育の基本思想を求めて——」を論述する際、その土台となったものである。

（1993年12月1日受理）

#### 註

- 1 サルトル（Sartre, J.-P.）の用語によれば、人間の存在本質とは絶えざる超出、自由である。人間は絶えず存在を、所与を、あるいは過去を無化し・超出して、非存在へ向かっていく。したがって、今、或る存在を超出してもそれはすぐ存在・前提に変わり、それ自体がまた超出される対象に変わる。人間はいかなる超出も超出し、永久に超出をやめることができない、この意味で、人間は永久に自由であるべく運命づけられている。（サルトル『存在と無——現象学的存在論の試み——』第三巻 人文書院1979年とくに第四部第一章「『ある』と『為す』—自由—」の項

- 2 「心性は、人々がそれを通して感じ、生き、行動する心のフィルターの日常態」であり、「心性史は、人びとのこの意識の日常の形態が過去においてどのようにあったかを明らかにし、それが何ゆえに変化してきたかを認識することを直接の目的とする思想史のひとつである。この心性史は「ながくまともにとりくまれることなく」「境界におしやられてきた」が、まさに「社会史がこれを取りあげる」。(中内敏夫『新しい教育史——制度史から社会史への試み』新評論 1987年 159頁)
  - 3 石川啄木「戦雲余録」1904年(『啄木全集』第四巻 筑摩書房 1967年 33頁)
  - 4 同「汝民日記」1906年(『啄木全集』第五巻 1967年 69頁)
  - 5 同「明治四十丁未歳日誌」1907年(同書 130頁)
  - 6 他の動物と異なり、自然を改変・加工する能力を持つ人間にあっては、〈世界〉は想像世界(内面の改変・加工)と現実世界(外的環境の改変・加工)の交錯である。そして交錯するこの両世界には、次のような相互関係が存在する。すなわち、〈現実世界〉において、実際の現実的行動・身体的行動によっては自由に改変しえない解決不能の問題、いわば絶対的な〈行きどまり〉に出会うと、人間は〈想像世界〉へと迂回し、そこから〈行きどまり〉の解決をめざすという、まさに人間に固有の内的経路を持つ。言いかえると、人間は、あるがままの〈世界〉において、つまり〈存在〉において、自らの限界に出会うと、そこから意識の上で超え出ようとする〈自由〉の本性を持つ(註1サルトルの項を参照のこと)。この本性を持つがゆえに、人間の内的世界と外的世界とは独特の特徴を持つことになる。すなわち、人間は、それぞれの成育環境その他の状況に応じて、個性と共通性が可能性としては千差万別の色どりで交錯する意識、いわば〈まなざし〉を持つことになるし、他方、同じように、人間にとっての〈世界〉は、それぞれの状況に応じて差異と類似の両要素によって独特に色あげされた、千差万別の様相で眼前に広がることになる。(拙稿「近代日本における〈子ども〉の誕生(2)——文学者による立身出世意識への批判、とりわけ花袋と啄木に焦点をあてて——」山梨県立女子短期大学紀要 第25号 1991年
  - 7 中村光夫『日本の近代小説』1991年 岩波書店 112頁
  - 8 石川啄木「林中書」1907年(前掲書『啄木全集』第四巻 107頁)
  - 9 同上 同頁
  - 10 三浦光子「幼き日の兄啄木」1964年(『啄木全集』第八巻 筑摩書房 1968年 17—29頁)
  - 11 伊藤整「石川啄木」(『伊藤整全集』第19巻 新潮社 1973年 304頁)
  - 12 前掲「近代日本における〈子ども〉の誕生(2)——文学者による立身出世意識への批判、とりわけ花袋と啄木に焦点をあてて——」8—12頁
  - 13 石川啄木「木馬」1909年(『啄木全集』第六巻 筑摩書房 1967年 304頁)
  - 14 人間に固有のこの不気味な本性について、心理的見地に力点を置いてであるが、おそらくもっとも興味深い解釈をくわえているのは、ニーチェ(Nietzsche, F.)である。彼によれば、自分の身を犠牲にする、つまり「生を敵視」するこの「哲学的精神」——「官能」を排し、「清貧と謙遜と貞潔」を理想とする——は、バラモンの苦行者のような場合には、極端に激越である。すなわち、彼らの生きたような「怖るべき時代」、貧困な生活基盤しか所有していないがゆえに、個人が、共同体の一歯車として、まるで浮草のように無常存在していた時代においては、「怖るべき手段」をもって、つまり「自己に対する残忍、独創的な苦行」をもって「世界を否定し、生を敵視し、官能を超脱」とするという極端な、しかし人間本性をもっとも如実に象徴するような倒錯形態が現象した。そして、そうした「自発的な損傷」に対して、自己棄却・自己懲罰・自己犠牲に対して一種の愉悅が感じられ、かつ求められ」もしたのである。そしてまた、さらにニーチェの説明に従えば、このような極端に倒錯した方法に訴えてまでも、人間という存在は、自らの種に固有の「生」、あるいは「意志」を、どうにかして保存し、存続させようとしてきたのだということになる。(ニーチェ『道徳の系譜』木場深定訳 岩波書店 1970年 134、144~145、148頁)。
- 人間に固有のこの無気味な生の否定を、註6で言及したようなサルトルの表現によっていい直せば、そのような生の否定は、存在から絶えず超出するという人間に固有の〈自由〉の本性を源泉として生み出されてくる行動であり、したがって〈現実世界〉において解決不能の〈行きどまり〉に遭遇したときに〈想像世界〉へ迂回するという人間に固有の内的経路の一現象形態にはかならないということになる。
- 15 石川啄木「弓町より(食ふべき詩)」1909年(前掲書第四巻 209、211頁)
  - 16 同「性急な思想」1910年(同書 241頁)
  - 17 同「きれぎれに心に浮かんだ感じと回想」1909年(同書 223頁)
  - 18 同「性急な思想」(同書 242頁)

- 19 同「きれぎれに心に浮かんだ感じと回想」(同書 223頁)
- 20 同「NIKKI I. MEIDI42NEN 1909」(ローマ字日記) 1909年(前掲書第六巻 1967年 122頁)
- 21 同「硝子窓」1910年(前掲書第四巻 246頁)
- 22 長谷川天溪「無解決と解決」1908年(『明治文学全集43』 筑摩書房 1967年 195頁)
- 23 島村抱月「自然主義の価値」1908年(同書 65頁)
- 24 同書 61頁
- 25 啄木「きれぎれに心に浮かんだ感じと回想」(前掲書 223頁)
- 26 同上 同頁
- 27 同「性急な思想」(前掲書 243頁)
- 28 片上弦「未解決の人生と自然主義」1908年(前掲書『明治文学全集43』 221頁)
- 29 啄木「きれぎれに心に浮かんだ感じと回想」(前掲書 223頁)
- 30 同上 同頁
- 31 同「時代閉塞の現状」1910年(同書 265頁)
- 32 同「きれぎれに心に浮かんだ感じと回想」(同書 225頁)
- 33 同「時代閉塞の現状」(同書 265頁)
- 34 同「性急な思想」(同書 243頁)
- 35 同上(同書 242頁)
- 36 同「きれぎれに心に浮かんだ感じと回想」(同書 226頁)
- 37 同「時代閉塞の現状」(同書 259頁)

#### 参考文献

- ・吉本隆明「石川啄木」(『吉本隆明全著作集7』 勁草書房 1968年)
- ・三笠乙彦「新教育理論の学問的基礎 — イギリス」(長尾十三二編『世界新教育運動選書 別巻2』) 明治図書 1988年
- ・石川啄木に関する先行研究は極めて膨大な量にのぼる。そのすべてをここに掲げることは無理であるので、それらの傾向によって論者を幾つかに類型化するという作業を提示するにとどめたい。類型化と

いっても、あくまでもひとつの目処であって、完全に区別できるものでないことはいうまでもないことであるが、とりあえず、次の四類型に分けられる。第一は、実証的・伝記的手法をとり、事実・史実にひときわ重きを置くすこぶる研究的な系列に属する型である。この類型は、たとえば、岩城之徳の啄木論がその典型であり、さらに今井泰子、遊座昭吾などの啄木論が含まれよう。第二の類型は、人物評価をも含めて、啄木の内面性・思想性を強く問題にする、いわば文学思想的な系列である。この類型は、さらに幾つかの小類型に分岐している。啄木晩年の思想について大きな論議をひき起こした金田一京助の啄木論のような回想型もあれば、梁取三義におけるようにジャーナリスティックな手法を用いたものもある。あるいは、桑原武夫、福田恒存、伊藤整などにおけるような文芸評論と呼ばれるものがあり、さらには、窪川鶴次郎、米田利昭、石田省育、助川徳是、上田博などにおけるような、いわゆる文学研究の色彩が強いものがある。先に、第一類型に含めた今井泰子の啄木論もむしろここに含めたほうがより適切かも知れない。

第三類型は、啄木の思想を進歩主義思想あるいはマルクス主義思想の先駆とする観点に大きな比重をかける系列である。したがって、第二類型に比して、より経済的・社会的視点を重視する。たとえば、土岐善麿、石川正雄、中野重治、平野謙、荒正人、小田切秀雄らの啄木論がここに属するし、鹿野正直の論もここに入れてよいものかもしれない。第四類型は、教育(学)という専門分野の観点から、とりわけ代用教員時代の啄木を重視する系列であり、上田庄三郎、上野浩道などの啄木論が挙げられる。

そしてさらにつけ加えるとすれば、第二類型と第三類型を統合・止揚する系列として松本健一、そして現段階でもっとも優れた分析視点を所有していると思われる吉本隆明の啄木論がある。とすれば、四つではなく、合計五つに類系化するほうがより妥当なのかもしれない。